

International Development Center of Japan
IDCJ 国際開発センター

アセアンで活躍する若手日本人たち

近年、経済的低迷が続く日本とは対照的に、アセアン諸国の経済成長は目覚ましい。ここ数年もその勢いが衰えないまま、推移している。2011年の日本の国内総生産（GDP）成長率がマイナス1パーセントであるのに対し、インドネシアの同年のGDP成長率は6パーセント、マレーシアのGDP成長率は5パーセントと良好な数値を達成している（出所：世界銀行WDI&GDF 2012）。このように、経済的閉塞状態から抜け出せず、また就職氷河期が続いている日本を離れ、アセアンに活路を求める日本人の若者の活躍が目立っている。

当センターでは、アセアン諸国における日本人若年層の就業状況および将来的ニーズについての調査を2012年2月より開始した。その一環として、マレーシアおよびインドネシアで就業している若手日本人に対してインタビュー調査を行ったところ、特にここ数年、日本人の雇用の幅が拡大しつつあることが確認された。この背景には、リーマン・ショック以降、経済の活気を失った日本や他の先進国から、好景気の続くアセアンに目を向ける日本人求職者が増え、また、アセアンで事業展開をする、あるいは拠点とする企業にも優秀な外国人人材を雇用するキャパシティが高まっていることが挙げられる。このように、日本人求職者、アセアン企業双方のニーズがマッチしていることが日本人労働市場拡大につながっていると考えられる。今回は、各都市で活躍する若手日本人を一例ずつ紹介したい。

まず、クアラルンプール在住の坪野香梨さん。坪野さんはクアラルンプール近郊のIT系工業団地にあるアメリカ系企業に勤務している。約2年前に東京にある企業から、それまでのキャリアを十分に生かせる条件での転職を実現した。現在は、サーバー関連プロジェクトのマネジメントを担当している。クアラルンプール周辺でのビジネスや生活は英語で十分で、マレー語はほとんど必要ないとのこと。坪野さんはアメリカの大学出身で、英語力は全く問題ない。現在、仕事面、生活面とも満足度が非常に高いと語る。

坪野さんが高校生の頃は、女

子大生にとっての就職氷河期で、働く女性としての将来像が日本では全く持てない状況だった。そんな時、母親に勧められて、アメリカの大学進学を考える

ようになった。アメリカ留学時も、将来を見据えてITを専攻し、その後の順調なキャリア構築につながったと言う。

次に、ジャカルタ在住の山田太郎さん（仮名）。山田さんは、約1年半前にジャカルタにある別の企業から現地大手航空会社に転職した。現在の業務は、企画から営業まで全般に及ぶ。通常業務はインドネシア語が多いが、山田さんはインドネシアの大学に留学しており、流暢にインドネシア語を操る。日々の業務は充実しており、やり甲斐を感じると言う。生活面の方も、ジャカルタの治安が年々格段に改善され、暮らしやすくなっていると語る。

山田さんはインドネシア留学後、そのままインドネシアに留まり、日系企業を中心にキャリアを積み、現在に至る。広告、家電、物流、航空業勤務の経験があり、その豊富なキャリアが現在の企業で評価され、業務に生かされている。海外では転職はキャリアに応じて、プラスに評価されるのが特徴だ。

アセアンで活躍する坪野さん、山田さんは、後に続く後輩達に次のようなメッセージを寄せてくれた。「自分を評価してくれる企業に、妥協せず挑戦してみる」「海外では日本国内の企業では経験できないような重要な業務を任されるので、挑戦してみる価値がある」「海外での就職に挑戦してみたいなら、今が好機です」。これからアセアンを目指す若手に対して、お二人の経験に裏打ちされた力強いエールがメッセージに込められている。

アセアン諸国における日本人労働市場の動向については、ジャカルタの日本人向けの就職斡旋企業関係者が、「今年に入り、日本人向けの求人数が通常の倍となっており、求職者数を大きく上回っている傾向が続いている」と語る。候補が不足しているため、日本在住の求職者にも声かけをしている状況となっている。このように、アセアン諸国において日本人労働市場が今後も拡大していくことが予想され、若手日本人の就職の機会も広がっている。

（文責：国際開発センター 主任研究員 高澤 直美）



発展を続けるジャカルタ市街



クアラルンプールのシンボル「ペトロナスツインタワー」＝マレーシア政府観光局